科目名	対象	単位数	他専攻	キャップ制対象外
情報リテラシー論	全専攻1・2年	2	／	―
担当教員 竹内　聖	期間 前期			

履修条件

Adobe製品が動作するノートPCを用意すること。WindowsでもMacでも可。
Adobe Creative Cloud 学生版（月額1980円1年間契約）を購入できること。詳細については初回ガイダンスにて説明する。

授業の概要

ICT（情報通信技術）の発展とともに、演劇の宣伝活動も変りつつある。本講では、情報化時代に必要なメディア情報リテラシーを学び、広報・宣伝活動のあり方を考える。
スマートフォンやインターネットの普及により演劇の広報や宣伝活動も従来のポスターやフライヤーに加えfacebookやTwitterなどのソーシャルメディア抜きでは考えられなくなっている。そのような時代にどのようなプロモーションが効果的か？紙の媒体と比べてどのようなことに注意を払わなくてはいけないのか？インターネットによりメディアが身近になり便利になった反面、今までと違った危険も多くなってきている。
インターネットと情報機器の正しい知識と使い方やソーシャルメディア時代のコミュニケーションと宣伝企画制作の基本を学び、公演のフライヤー、プログラム、ホームページ制作の技術を習得する。

授業の到達目標

- メディア情報リテラシーの重要性を理解し、説明することができる。
- 宣伝企画制作の基本を理解し、フライヤー、プログラム、ホームページなどの制作ができる。
- ソーシャルメディアを活用した宣伝活動ができる。

授業計画

第1回　ガイダンス
　　演劇における宣伝美術とメディアリテラシーについて
第2回　フライヤーなどの制作に使うソフトウエアの説明と基本操作
第3回　PhotoShopを使った画像処理
第4回　写真の撮り方と画像処理（photoshop）
第5回　レイアウトツールIllustratorの基本操作1
第6回　Illustratorを使ったレイアウト実習1
第7回　Illustratorを使ったレイアウト実習2
第8回　公演の企画と宣伝美術のメインビジュアル企画
第9回　メインビジュアルとポスター・フライヤー・チケットなどの制作ー1
第10回　メインビジュアルとポスター・フライヤー・チケットなどの制作ー2
第11回　ソーシャルメディアでの広報、宣伝を考える
第12回　Webサービスを使ったWebサイトの制作
第13回　Webサイトとfacebook page の制作
第14回　公演宣伝企画プレゼン講評会ー1
第15回　公演宣伝企画プレゼン講評会

授業時間外の学習

- photoshop、illustrator習得のための復習と課題制作。
- SNSなどの利用。制作ツールやWEBサービスを使ったサイト制作の自習。
- 公演チラシや特設サイトなどの情報収集。

教科書・参考書等

授業内外でPC、スマートフォンを使用する。
特にPCは毎時間持参のこと。PCを持っていなくても受講は可能だが、必ずガイダンスの時に相談してほしい。これからの社会においてPCは必要なツールなので持っていない人はこの機会に購入することを勧る。ソフトウエアはAdobeのCreative Croudを購入してもらうが、詳細についてはガイダンスで説明する。すでに古いバージョンのソフトを購入済みの人は新規に購入する必要はない。

成績評価

1. 授業への取り組み（50点）
2. 授業態度・積極性（20点）
3. プレゼンテーション（30点）

S 総合点90点以上（授業への取り組み、授業態度・積極性がたいへん良く、極めて優れたプレゼンテーションができる）。
A 総合点80点以上（授業への取り組み、授業態度・積極性が良く、優れたプレゼンテーションができる）。
B 総合点70点以上（授業への取り組み、授業態度・積極性が良く、プレゼンテーションができる）。
C 総合点50点以上（授業への取り組み、授業態度・積極性、プレゼンテーションのいずれかが不十分）。
D 総合点49点以下（授業への取り組み、授業態度・積極性、プレゼンテーションのいずれも不十分）。

科目名	対象	単位数	他専攻	キャップ制対象外
映画論	全専攻1・2年	2	／	○
担当教員 行定　勲	期間 後期集中			

履修条件

特になし。

授業の概要

本講義では、映画はどうやって制作されていくのか題材をどこに求めるのか等について、演劇と映画の具体的な作品を参照にしながら、テーマごとに掘り下げていく。具体的な作品の解説を通じて講義を進めていくため、学術的な内容よりも実践的な内容が中心となるが、映画制作にとどまらず創作活動において重要となる要素について、丁寧に取り扱っていければと考えている。
講義を通じて、学生の皆さんと質疑応答だけでなくテーマごとにディスカッションを活発にできればと、思っている。

授業の到達目標

映画制作に関するいくつかの論点を通じて、映画制作にとどまらず、創作活動において基礎となる大事なポイントを理解することができる。

授業計画

以下、テーマについて、具体的な作品を参照しながら、解説、ディスカッションの流れで授業を進めていく。
第1回　映画はどうやって制作されているのかという概論①
第2回　映画はどうやって制作されているのかという概論②
第3回　演出における自作論と発想①
第4回　演出における自作論と発想②
第5回　演劇作品の映画化についての考察
第6回　映画における演劇的演出の意義
第7回　評価されることの意義
第8回　映画化企画のプレゼンテーション

授業時間外の学習

授業時に適宜指示する。

教科書・参考書等

なし。

成績評価

授業への取組みとレポート課題（予定）で総合的に評価する。
S　授業への取り組みと課題の成果がたいへん優れている。
A　授業への取り組みと課題の成果が優れている。
B　授業への取り組みもしくは課題の成果が優れている。
C　授業への取り組みもしくは課題の成果が不十分。
D　授業への取り組みも課題の成果も不十分。

科目名	対象	単位数	他専攻	キャップ制対象外
音楽基礎演習ーバロック・ダンス	音楽専攻１年	1	／	―
担当教員 浜中　康子	期間 前期			

履修条件
音1必修。

授業の概要
17世紀初めの頃から18世紀半ばにかけてフランス宮廷を中心に栄え、ヨーロッパ中に広まっていったダンスをバロック・ダンスと称する。
メヌエットやガヴォット等がその代表的なものであり、日頃演奏や鑑賞を通して関わっているこれらのバロック舞曲を、実際のダンス・ステップを通して体験する。バロック・ダンスのステップや踊り方は、現存する舞踏譜やダンス教本によって300年以上経た今、復元することができる。これらの読み方についても触れ、音楽とダンスの歴史的及び運動的関連性を明らかにする。
ダンスの実習と共に、器楽で舞曲を演奏し、実際にダンスの伴奏を試みたい。

授業の到達目標
様々な舞曲の中でブレ、メヌエット、カヴォットを発表できるように仕上げる。

授業計画
各授業とも、歴史的資料（舞踏譜等）に基づいてダンス実技実習を中心とする。
第1回　テクニックの基本、歴史的背景
第2回　同上（2）
第3回　ブレ、メヌエットを中心に
第4回　同上（2）
第5回　同上（3）
第6回　同上（4）
第7回　同上（5）
第8回　同上（6）
第9回　ガヴォット、サラバンド他
第10回　同上（2）
第11回　同上（3）
第12回　同上（4）
第13回　まとめ　総合的な練習
第14回　同上（2）
第15回　同上（3）

授業時間外の学習
・授業中は知的な理解に留まることも身体表現としてスムーズに行えるようにステップ名と動きを結びつけながらリピート練習すること。
・様々な作曲家・時代の舞曲を数多く演奏・鑑賞すること。

教科書・参考書等
書籍：「栄華のバロック・ダンス―舞踏譜に舞曲のルーツを求めて」浜中康子著（音楽之友社）
DVD：フランス宮廷の華「バロック・ダンスへの招待」Ⅰ・Ⅱ　浜中康子監修（音楽之友社）
服装：膝の曲げ伸ばしが行いやすいパンツまたはスカート（タイトスカート不可）、ダンスシューズ使用

成績評価
成績評価については、授業への取り組み・レポート、学期末実技発表の結果を総合的に判断して行う。
S　総合点が90点以上の者（授業内容を十分に理解し、課題への取り組みが的確かつ秀でた者）。
A　総合点が80点以上の者（授業内容を十分に理解し、課題への取り組みが的確だった者）。
B　総合点が60点以上の者（授業内容の理解、課題への取り組みが良好だった者）。
C　総合点が50点以上の者（授業内容の理解、課題への取り組みが不十分だった者）。
D　総合点が49点以下の者（授業内容を理解しなかった者、学期末試験未提出者、授業への取り組み、受講態度などに問題がある者）。

科目名	対象	単位数	他専攻	キャップ制対象外
演奏会制作法	音楽専攻１年	1	○	―
担当教員 伊藤　直樹	期間 後期			

履修条件
演奏会等の企画・制作に興味があり、自らの音楽活動に役立てたい者。

授業の概要
文化ホールなどで行う演奏会は、企画から実施まで細かな行程のもとに実施されている。本授業では、演奏会実施の目的や意図を明確にしたうえで、企画から予算作成、公演実施に至るまでの基礎知識を学び、各々が企画書を作成し、発表･考察を行う。

授業の到達目標
- 演奏会を企画・実施するまでの内容や行程を理解し、演奏会の企画制作ができる。
- 公共ホール（公立文化施設）の地域への関わり、役割を理解する。

授業計画
1　ガイダンス（授業内容と目的、基礎アンケート）
2　文化ホールの役割・アウトリーチ①
3　文化ホールの役割・アウトリーチ②
4　企画書（1）の作成・発表・考察①
5　企画書（1）の作成・発表・考察②
6　演奏会実施までのスケジュールと内容①
7　演奏会実施までのスケジュールと内容②
8　著作権法、楽曲使用料等について
9　演奏会実施に係る予算と内容について
10　企画書（2）の作成・発表・考察①
11　企画書（2）の作成・発表・考察②
12　劇場の仕組み、劇場用語等について
13　企画書（3）の作成・発表・考察①
14　企画書（3）の作成・発表・考察②
15　まとめ

授業時間外の学習
劇場公演の鑑賞、近隣文化ホールの見学。

教科書・参考書等
資料プリントを配布。

成績評価
授業の取り組み姿勢/企画書等の提出物で判断する。
S　基本的な内容を十分把握できて、授業への取り組みが積極的である。
A　基本的な内容を十分理解できて、授業への取り組みが積極的である。
B　基本的な内容をほぼ理解できて、授業への取り組みが積極的である。
C　基本的な内容をある程度理解できているが、授業への取り組みが積極でない。
D　基本的な内容を理解できておらず、授業への取り組みが積極でない。

科目名	対象	単位数	他専攻	キャップ制対象外
合唱Ⅰ・Ⅱ	音楽専攻１年	1・1	／	―
担当教員 樋本　英一	期間 前期・後期			

履修条件

本授業は必修科目である。音楽大学で、なぜ「合唱」が必修であるかを考え、熱意、意欲をもって受講すること。

授業の概要

合唱作品とその演奏を通して、合唱及び声楽において息の線、そのゆれ、そして言語の発音、意味がいかにその作品を演奏する上で重要かを知り、その上でアンサンブルすることの意味、楽しさを味わう。その過程に合唱作品を練習、指導していく方法、要領が含まれる。

授業の到達目標

- 詞（テキスト）、音楽に即した息づかいをし、それを人と合わせていくこと、その楽しさを知る。
- 声によるハーモニー感、アンサンブル能力を身につける。

授業計画

1　パート分け及び平易な作品による導入
2―4　ルネッサンスあるいは古典期ごろの宗教作品
5―7　イタリア語による作品
8―10　ドイツ語による作品
11―15　日本の合唱作品①
16―18　日本の合唱作品②
19―21　日本の合唱作品③
22―24　日本の合唱作品④
25―27　日本の合唱作品⑤
28―30　ポップス系の合唱作品

授業時間外の学習

授業で不十分であった譜読みは各自で補うこと。
配布されたコピー譜を各自製本すること。

教科書・参考書等

授業用コピー譜をその都度配布。

成績評価

成績評価については、授業への取り組み・レポート、学期末課題の結果を総合的に判断して行う。

S　総合点が90点以上の者（授業内容を十分に理解し、演奏能力、課題への取り組みが的確かつ秀でた者）。
A　総合点が80点以上の者（授業内容を十分に理解し、演奏能力、課題への取り組みが的確だった者）。
B　総合点が60点以上の者（授業内容の理解、演奏能力、課題への取り組みが良好だった者）。
C　総合点が50点以上の者（授業内容の理解、演奏能力、課題への取り組みが不十分だった者）。
D　総合点が49点以下の者（授業内容を理解しなかった者、演奏能力、学期末試験未提出者、授業への取り組み、受講態度などに問題がある者）。

科目名	対象	単位数	他専攻	キャップ制対象外
楽器法	音楽専攻２年	2	◎	○
担当教員 大澤　健一	期間 前期集中			

履修条件

特になし。

授業の概要

人が音を奏でる手段としての楽器は太古から今日にいたるまで実に多くの楽器が作られてきた。伝達、信号として登場した楽器は次第に歌や踊りの伴奏として使われ、やがて音楽を伝える主役楽器となった。授業では、現在の管弦楽などで使われる楽器について講義するが、その楽器の原点である民族楽器についてもふれる。木管、金管、打楽器、弦楽器に分類して、その誕生と現在の役割、使用楽曲、メンテナンスなどについて講義する。

これら楽器の正確な知識は、あらゆる音楽に携わるすべての行動に必要不可欠であろう。

授業の到達目標

- 楽器というものが、どのように分類され、どのような歴史をたどって、現在使われているかを理解する。また作編曲、器楽指導に必要な楽器の基礎知識を学習する。
- 気鳴楽器、弦鳴楽器、膜鳴楽器、体鳴楽器、機械電気楽器の5つの楽器体系を理解し、全ての楽器がこれらに分類されることを理解する。

授業計画

［進行予定］
木管楽器…フルート、オーボエ、クラリネット、ファゴット、サクソフォン
金管楽器…トランペット、ホルン、トロンボーン、ユーフォニアム、テューバ
弦楽器……ヴァイオリン、ヴィオラ、チェロ、コントラバス
打楽器
体鳴楽器…シンバル、トライアングル、ドラ、鍵盤楽器他
膜鳴楽器…太鼓、ティンパニー、タンバリン、ボンゴ他

［ポイント］
1 構造……発音原理、楽器の材質
2 音域……調性、最低音、最高音、適切音域
3 特色……得意な奏法、不得意な奏法
4 同属楽器……調性の異なる同属楽器
5 歴史……楽器の誕生について
6 楽曲……この楽器を説明するのに適した楽曲
7 メンテナンス…楽器の取り扱い上での注意点

授業時間外の学習

室内楽、管弦楽のコンサートを鑑賞し、使用される各楽器の特徴を調べておくこと。

教科書・参考書等

参考プリントを授業で配布する。

成績評価

成績評価については、授業への取り組み、レポートの結果を総合的に判断して行う。

S　総合点が90点以上の者（講義内容を十分に理解し、課題への取り組みが的確かつ秀でた者）。
A　総合点が80点以上の者（講義内容を十分に理解し、課題への取り組みが的確だった者）。
B　総合点が60点以上の者（講義内容の理解、課題への取り組みが良好だった者）。
C　総合点が50点以上の者（講義内容の理解、課題への取り組みが不十分だった者）。
D　総合点が49点以下の者（講義内容を理解しなかった者、学期末試験未提出者、授業への取り組み、受講態度などに問題がある者）。

科目名	対象	単位数	他専攻	キャップ制対象外
音楽マネジメント	音楽専攻２年	2	／	―
担当教員 児玉　真	期間 前期			

履修条件

音楽の社会的な役割やその意義について興味があり、特にそのサポートや仕組み作りに興味のある者。

授業の概要

芸術音楽を自らの生きる力を高めるために活用できる人を増やすことが社会の健全性にとって重要であるという認識が拡がってきました。音楽マネジメントは、コンサートの作り方だけでなく、音楽家の生き方を考えたり音楽を社会と結びつけることによって、単に音楽人口を増やすという以上の意味を持たせようとしています。音楽団体や文化会館などがワークショップやアウトリーチといった手法を積極的に取り上げているのはその流れに沿った活動です。その仕組みを考え活かせるような方法を考えていきます。

授業の到達目標

- 音楽の企画するために聴き手のどんなことを考えるべきかを理解する。
- そのために必要なスキルの入口を体験するとともに、言語化できるようにする。
- アウトリーチやワークショップなどの手法を理解し、プログラムの作り方を考える。

授業計画

第1回　オリエンテーションと自己紹介、音楽マネジメントの守備範囲
第2回　音楽マネジメントとは何か
第3回　コンサートの成り立ち
第4回　クラシック音楽のマーケットとビジネスモデル
第5回　音楽は単に商売ではない（社会性など別の側面）
第6回　才能のある音楽家をどうやって売り出すか１（YCA）
第7回　才能のある音楽家をどうやって売り出すか２
第8回　企画のつくり方１（シーズ＝種を活かす）
第9回　企画のつくり方２（ニーズを考える）
第10回　企画を提案する
第11回　広報と宣伝を考える
第12回　アウトリーチを見る
第13回　アウトリーチの行き先を考える
第14回　アウトリーチのアナライズ
第15回　まとめ

授業時間外の学習

- 機会があればコンサートにはなるべく行き、制作者の立場で観察してほしい。
- 音楽や音楽事業、文化会館の動向などに関するニュースに注意を払うこと。

教科書・参考書等

授業時に必要に応じて紹介する。

成績評価

筆記試験は行わないが、レポート課題を提出してもらう。評価は日常の好奇心や発言など（50点）、レポート（50点）として採点する。

S　総合点が90点以上の者（講義内容を十分に理解し、課題への取り組みが的確かつ秀でた者）。
A　総合点が80点以上の者（講義内容を十分に理解し、課題への取り組みが的確だった者）。
B　総合点が60点以上の者（講義内容の理解、課題への取り組みが良好だった者）。
C　総合点が50点以上の者（講義内容の理解、課題への取り組みが不十分だった者）。
D　総合点が49点以下の者（講義内容を理解しなかった者、学期末試験未提出者、授業への取り組み、受講態度などに問題がある者）。

科目名	対象	単位数	他専攻	キャップ制対象外
演奏解釈（２）声楽曲	音楽専攻２年	2	◎	―
担当教員 相田　麻純	期間 前期			

履修条件

声楽専修必修。他専修も積極的に履修してほしい。

授業の概要

声楽が他の演奏分野と決定的に違うのは、音楽に言葉が付属している点にある。この授業では歌詞の理解と、その歌詞に音楽をつけた作曲家の意図を探っていく。歌唱する上で声を鍛錬することは重要だが、音楽表現を追求することも同様にとても大切なことである。ただ歌うだけの演奏ではなく、きちんと曲を理解することで、演奏する上での表現力を引き出すプロセスを一緒に学んでいく。

前半は、全４期に分類されている日本歌曲の作曲家の作品を取りあげ、後半はオペラの代表的作品であるモーツァルト作曲の《フィガロの結婚》を登場人物に分けて解釈していく。

授業の到達目標

- 楽譜と歌詞から曲に込められた想いを読みとり、演奏する上での理解を深める。

授業計画

第1回　授業ガイダンス。日本歌曲の変遷について、担当曲決め
第2回　日本歌曲：第1期の代表的な作曲家と作品①
第3回　日本歌曲：第1期の代表的な作曲家と作品②
第4回　日本歌曲：第2期の代表的な作曲家と作品①
第5回　日本歌曲：第2期の代表的な作曲家と作品②
第6回　日本歌曲：第3期の代表的な作曲家と作品①
第7回　日本歌曲：第3期の代表的な作曲家と作品②
第8回　日本歌曲：第4期の代表的な作曲家と作品
第9回　オペラ：モーツァルト作曲《フィガロの結婚》における原作と台本
第10回　オペラ：フィガロの人物像と音楽
第11回　オペラ：スザンナの人物像と音楽
第12回　オペラ：伯爵の人物像と音楽
第13回　オペラ：伯爵夫人の人物像と音楽
第14回　オペラ：ケルビーノの人物像と音楽
第15回　オペラ：その他の役柄の人物像と音楽、まとめ

授業時間外の学習

日本歌曲においては、一人一曲を担当し、作曲家と作詞家の関係性や歌詞の意味などを調べておくこと。オペラにおいては《フィガロの結婚》のあらすじや登場人物について予習しておくこと。

教科書・参考書等

授業時に毎回楽譜とプリントを配布する。

成績評価

成績評価については、授業への取り組み・学期末課題の結果を総合的に判断して行う。

S　総合点が90点以上の者（授業内容を十分に理解し、演奏能力、課題への取り組みが的確かつ秀でた者）。
A　総合点が80点以上の者（授業内容を十分に理解し、演奏能力、課題への取り組みが的確だった者）。
B　総合点が60点以上の者（授業内容の理解、演奏能力、課題への取り組みが良好だった者）。
C　総合点が50点以上の者（授業内容の理解、演奏能力、課題への取り組みが不十分だった者）。
D　総合点が49点以下の者（授業内容を理解しなかった者、演奏能力、学期末課題未提出者、授業への取り組み、受講態度などに問題がある者）。

科目名	対象	単位数	他専攻	キャップ制対象外
演奏解釈（3）室内楽曲	音楽専攻２年	2	／	―
担当教員 寺岡 有希子	期間 前期			

履修条件

弦楽器専修必修。
他専修の積極的な履修を望む。

授業の概要

この授業は他の専修学生にも広く開放している。古典派の弦楽による室内楽作品を中心とするが、履修者の状況により、声楽ピアノ、管楽器等も含まれる作品も取り上げ授業を進めていく。授業形態としては学生の演奏を基本とし、作曲家とその作品に対してより知識を深め、「演奏」という実践にどのようにしたら結び付いていくか考えていく。学生全員参加の活発な意見交換の場になるよう、望んでいる。

授業の到達目標

スコアから作曲家の意図するものをはじめ、様々なことを読み取れるようになること。またそれらを表現につなげていけることを目標とする。

授業計画

ハイドン・モーツァルト・ベートーヴェンの弦楽による室内楽作品を基礎課題とするが、履修者の状況を考慮しつつ様々な形態(例えば、声楽曲、フルート四重奏曲やピアノ五重奏曲等）の室内楽作品を取り上げていく。

第1回　ガイダンス及び曲目の検討
第2回　曲目とメンバーを決定
第3～7回　スコアリーディングと合奏
第8回　楽曲のまとめ。発表演奏の曲を決定
第9回　パート練習
第10～14回　アンサンブル実習
第15回　発表演奏

授業時間外の学習

授業で演奏するメンバーは事前にリハーサルをしておくこと。
またその曲の作曲者についてや作曲された背景、各自の楽器の詳細についても調べておくこと。

教科書・参考書等

課題となる曲のスコアをプリントして配布するので、必ず授業に持参すること。

成績評価

成績評価については、授業への取り組み・学期末課題の結果を総合的に判断して行う。

S　総合点が90点以上の者(授業内容を十分に理解し、演奏能力、課題への取り組みが的確かつ秀でた者)。
A　総合点が80点以上の者(授業内容を十分に理解し、演奏能力、課題への取り組みが的確だった者)。
B　総合点が60点以上の者（授業内容の理解、演奏能力、課題への取り組みが良好だった者)。
C　総合点が50点以上の者（授業内容の理解、演奏能力、課題への取り組みが不十分だった者)。
D　総合点が49点以下の者（授業内容を理解しなかった者、演奏能力、学期末試験未提出者、授業への取り組み、受講態度などに問題がある者)。

科目名 身体トレーニングａｂｃｄ	対象 演劇専攻１年	単位数	他専攻	キャップ制対象外
担当教員 山本　光二郎	期間 前期	1	／	―

履修条件

必修。
カラダを動かすことをいとわない者。

授業の概要

- カラダで表現することに気づき、可能性を確かめる授業である。テクニックの習得もさることながら、受講者個人のカラダに対する許容範囲を広げることを目的とする。
- カラダの柔軟性、カラダの持っているリズムを確認する。
- ダンスカンパニーコンドルズの持つ不思議な世界を紹介する、そこから舞台人として自身の見せ方、見られ方を学ぶ。
- 楽器を使える人、声を使える人はコンテンポラリーダンスを自身のパフォーマンスと融合することを学ぶ。

授業の到達目標

カラダを動かすことによって気付く自身の可能性を発見、認識、利用、表現することができる。

授業計画

第1回	ガイダンスを受ける
第2回～第6回	ストレッチする カラダで遊んでみる 踊るを遊ぶ
第7回～第10回	振付けを覚えるトレーニング、音楽と共に動きのフレーズを学習する 雑誌、絵本などメディアを使って踊ることを学ぶ
第11回～第15回	コンドルズのダンスを踊ってみる 演出を含めた小作品をつくる

授業時間外の学習

授業に参加するには健康であることが大前提であるので、日常的に怪我や病気に注意し、健やかな状態を維持すること。

教科書・参考書等

動きやすい、床に転がってもよい服装
裸足もしくは靴下

成績評価

授業への取り組み重視（90％）、レポート提出（10％）を100点に換算
S：90点以上
A：80点以上
B：60点以上
C：50点以上
D：50点未満

科目名 演技演習Ａ（ダイアローグ）ａｂ	対象 演劇専攻２年	単位数	他専攻	キャップ制対象外
担当教員 大谷　賢治郎	期間 前期・後期	2	／	―

履修条件

ストレートプレイコース必修。授業時間外での自習、自主稽古を必要とする。アーティストとしての自立、ならびに共同作業の二つを両立させること。稽古着を着用すること。

授業の概要

ダイアローグ=対話の演劇創造を可能とするための「相手と関わる」ことのできる俳優の心身の確立。
アーティスト自身の想像力を以て、即興からグループワークでシーンを作る、ディバイジングの用法を用いて自分自身と客観的に向き合うシーンを創る。
ダイアローグをメインにしたシーンを既存の戯曲から抜粋、「シーンワーク」を行なう。創造過程を学習し、最終発表を行なう。
シーンの中の対話に留まらず、演劇活動に於ける全ての対話、「アーティスト同士の対話」「観客との対話」「社会との対話」にも創造過程に於いて目を向ける。

授業の到達目標

1. ディバイジングによるシーンの発表（グループワーク）ができる。
2. 課題で与えられたシーンの発表（二人一組）ができる。
3. 自分で見つけたシーンの発表（二人一組）ができる。
4. 創造過程に於ける自分自身について、そして他者についての発見の報告（個人）ができる。

授業計画

第1回 授業ガイダンス/目標設定
第2回 身体訓練について/演劇的自己紹介①
第3回 演劇的自己紹介②
第4回 サブテキストによる対話シーンの創造①
第5回 サブテキストによる対話シーンの創造②
第6回 フィジカルシアター（身体表現）①
第7回 フィジカルシアター（身体表現）②
第8回 ディバイジング（グループワークの創造）①
第9回 ディバイジング（グループワークの創造）②
第10回 ディバイジング（グループワークの創造）発表
第11回 課題戯曲によるシーンワーク①
第12回 課題戯曲によるシーンワーク②
第13回 課題戯曲によるシーンワーク発表①
第14回 課題戯曲によるシーンワーク発表②
第15回 総評/自己と他者に関する発見の報告
※授業内容に関しては、その進行具合により、多少の前後があることを承知しておくこと。

授業時間外の学習

各シーンワーク発表に向けての自習ならびに自主稽古。

教科書・参考書等

教科書：教材は授業時に発表。
参考書：必要に応じて随時指定。

成績評価

1. 授業への取組み　2. 発表の内容の総合的評価

S　授業への取組み、創造過程への関わり方、シーンワークの発表が高く評価できる。
A　授業への取組み、創造過程への関わり方、シーンワークの発表が高く評価できる。
B　授業への取組み、創造過程への関わり方、シーンワークの発表が評価できる。
C　各課題の発表まで達している。
D　各課題の発表が評価できない。

科目名	対象	単位数	他専攻	キャップ制対象外
演劇特別演習Ⅰ①②③	演劇専攻１年	1	／	―
担当教員 鴻上　尚史	期間 後期			

履修条件
やる気があれば、それでいい。逆にいえば、やる気がないのになんとなくは受けないでほしい。それは、お互いの不幸になる。

授業の概要
正しい発声とは何か？をはじめとして、「正しい身体とは何か？」「演技とは何か？」など、基本的なことをおさえる。

授業の到達目標
舞台に立つにふさわしい声や身体、演技の考え方、アプローチのしかたを身につけてほしい。

授業計画
第1回　正しい発声とは何か？①
第2回　正しい発声とは何か？②
第3回　正しい発声とは何か？③
第4回　正しい発声とは何か？④
第5回　正しい発声とは何か？⑤
第6回　正しい身体とは何か？①
第7回　正しい身体とは何か？②
第8回　正しい身体とは何か？③
第9回　正しい身体とは何か？④
第10回　リアルな演技とは何か？①
第11回　リアルな演技とは何か？②
第12回　リアルな演技とは何か？③
第13回　リアルな演技とは何か？④
第14回　リアルな演技とは何か？⑤
第15回　リアルな演技とは何か？⑥

授業時間外の学習
とにかく、いろんな芝居（特に20代とか同世代の）を見てほしい。20代の俳優が何をしているか、仙川から出て、見ること。

教科書・参考書等
参考書としては、「あなたの魅力を演出するちょっとしたヒント」（講談社文庫）と「俳優になりたいあなたへ」（ちくまプリマー新書）「演技と演出のレッスン」（白水社）です。
が、あくまで参考書であるので、無理に買うことはない。授業でちゃんと行う。

成績評価
授業への取組み及び授業での参加態度・試験結果で評価する。
S　総合評価100点
A　総合評価90点以上
B　総合評価70点以上
C　総合評価50点以上
D　総合評価50点未満

科目名	対象	単位数	他専攻	キャップ制対象外
狂言Ⅰ①②	演劇専攻１年	1	○	―
担当教員 善竹　富太郎	期間 後期			

履修条件
特になし。
音楽専攻日本音楽専修は必修。

授業の概要
・腹式呼吸でしっかり声を出す訓練から始める。
・狂言の謡を謡い、身体を動かす訓練の舞を舞う。
・狂言「附子」または「呼声」を実習する。
・三次元の空間に自分の体がどのようにあるべきか演劇の基本が感得できるだろう。

授業の到達目標
大きな声を出すことができる。
まっすぐ前を向いて（下、横を見ずに）摺り足で前に進み元の位置に正しく戻ることができる。
「左右」の完成。

授業計画
第1回　オリエンテーション（声の出し方）「盃」の謡①
第2回　「盃」の謡②　お話「声楽と謡」のちがい
第3回　「盃」の謡③　お話「すりについて」「盃」の舞①
第4回　「泰山府君」謡①　「盃」謡④　「盃」の舞②
第5回　「泰山府君」謡②　「盃」謡⑤　「盃」の舞③
第6回　「土車」の謡①　「泰山府君」謡③　「盃」の舞④
第7回　「土車」の謡②　「泰山府君」謡④　舞の試験⑤
第8回　「土車」の謡③　「泰山府君」謡⑤　泰山府君の舞①
第9回　「土車」の謡④　泰山府君の舞②
第10回　「土車」の謡⑤　泰山府君の舞③
第11回　土車の舞①　泰山府君の舞④
第12回　土車の舞②　泰山府君の舞⑤
第13回　土車の舞③
第14回　土車の舞④
第15回　「土車」試験

授業時間外の学習
授業内容をふまえ、自主練習を行うこと。

教科書・参考書等
「狂言」ガイドブック（三省堂）

成績評価
平常点（授業への取組み・受講態度）と実技。
S　出席点90%以上　実技点90点以上
A　出席点80%以上　実技点80点以上
B　出席点70%以上　実技点65点以上
C　出席点50%以上　実技点50点以上
D　出席点49%以下　実技点49点以下

科目名	対象	単位数	他専攻	キャップ制対象外
劇作法	演劇専攻１・２年	1	○	―
担当教員 瀬戸山　美咲	期間 後期			

履修条件
人間と社会に興味がある人。ディスカッションに積極的に参加できる人。

授業の概要
演劇の土台となる戯曲を実際に書いてみる。
骨格を考え、あらすじをつくり、戯曲を執筆する。授業内でリーディングをおこない、お互いに講評し、ディスカッションを重ねてブラッシュアップしていく。

授業の到達目標
- 30分程度の短編戯曲を書き上げることができる。
- ほかの人が書いた戯曲について分析し、言葉にできる。

授業計画
第1回　戯曲とは何か
第2回　ログライン発表1
第3回　ログライン発表2 登場人物について
第4回　ログライン発表3 構成について
第5回　シノプシス発表1
第6回　シノプシス発表2
第7回　シノプシス発表3
第8回　第一稿リーディング・ディスカッション1
第9回　第一稿リーディング・ディスカッション2
第10回　第一稿リーディング・ディスカッション3
第11回　第一稿リーディング・ディスカッション4
第12回　第二稿リーディング・ディスカッション1
第13回　第二稿リーディング・ディスカッション2
第14回　第二稿リーディング・ディスカッション3
第15回　第二稿リーディング・ディスカッション4

授業時間外の学習
- さまざまな演劇、映画、ドラマ作品を見て、構造を分析する。
- 各自、下調べ・取材をして戯曲を執筆する。

教科書・参考書等
授業時に指示もしくは配布する。

成績評価
授業への取り組み50%　戯曲の完成度50%で100点換算
S　総合点が90点以上
A　総合点が80点以上
B　総合点が60点以上
C　総合点が50点以上
D　総合点が49点以下

科目名	対象	単位数	他専攻	キャップ制対象外
舞台照明実習①	演劇専攻１年	1	○	○
担当教員 石島　奈津子	期間 前期集中			

履修条件
照明部以外の学生を対象とする。

授業の概要
- 舞台照明の変遷
- 舞台照明の基本的な設備と配置
- 各種照明器材の説明
- 仕込みから撤去まで、照明の基本的な作業内容
- 照明デザインと表現者の関わり方
- 舞台で作業する上での安全確保

以上の事を、実際に小劇場の機構を使用して実習する。

授業の到達目標
- 舞台の基本的な照明機構や機材を理解できる。
- 舞台における照明の効果を理解して、それを表現手段のひとつとして利用することができる。
- 舞台の設営作業の安全基準の現状を知ることによって、安全に意識を持ち、怪我や事故などから身を守ることができる。

授業計画
小劇場を実際の舞台に見立て、照明器材を、通常よく使われている位置に簡易に設置して、実物を前に説明をしたり、スポットに実際に接して、その効果を体感、理解してもらう。

授業時間外の学習
劇上演実習等の際、照明の存在を意識して、表現を深めるための効果を、照明を利用して得られる方法を検討してみる。

教科書・参考書等
なし。

成績評価
①授業態度、②課題への取り組み、③表現者としての真摯な姿勢、④自らを研鑽する意欲、⑤課題の成果
以上を元に総合的に評価する。
S：90点以上、①～⑤のうち全てを獲得した者
A：80点以上、①～⑤のうち４つを獲得した者
B：60点以上、①～⑤のうち３つを獲得した者
C：50点以上、①～⑤のうち２つを獲得した者
D：50点未満、①～⑤のうち１つしか獲得できなかった者

科目名	対象	単位数	他専攻	キャップ制対象外
舞台照明実習②	演劇専攻１年	1	／	○
担当教員 兼子　慎平	期間 前期集中			

履修条件
実習が主になるので、稽古着・稽古履など動きやすい服装で受講すること。
また（舞台）照明に興味がある事。舞台照明作業に一度でも触れている事が望ましい。

授業の概要
参加者全体で取り組む舞台照明の作業を通して、各々の協調性・自立性、またそのバランスのとり方を体で認識すること。そしてその認識を頭と体で昇華し、それぞれの段階で作業に『実践』してみる所までこの実習では求めることとする。
作業の中で上記過程を繰り返すことにより、基本的かつ実践的な舞台照明の基礎を学ぶことを目標とする。
また照明と演者の関係を考察してみる機会も提供する。

授業の到達目標
基本的かつ実践的な舞台照明の基礎を身につけることができる。

授業計画
① 照明の仕込み作業を学ぶ①（午前）
② 演者と照明（スタッフワーク）の関わりについて（ディスカッションを含めた考察）
③ 照明の仕込み作業を学ぶ②（午後）
④ 特殊機材を扱う
⑤ 舞台照明（シーン）を作る
⑥ 質疑応答

授業時間外の学習
舞台照明に触れる機会があれば積極的に参加してほしい。
また、『良い演技』あるいは『良いスタッフワーク』とは何か、機会があれば考察してみてほしい。

教科書・参考書等
教科書は特に無し。実習で使用する図面等は講義時に配布。
また参考図書についても講義時にいくつか紹介する。

成績評価
S　講義・作業に積極的に関わり、協調性・自立性　両方が認められ、特にリーダーシップも発揮できる者
A　講義・作業に積極的に関わり、協調性・自立性　両方が認められた者
B　講義・作業に積極的に関わり、協調性・自立性どちらか一方でも認められた者
C　積極性にはやや欠けるが、講義内容を努めて真面目に理解しようと認められた者
D　積極性に欠け、講義内容も理解しようと認められなかった者

科目名	対象	単位数	他専攻	キャップ制対象外
舞台音響実習①	演劇専攻１年	1	○	○
担当教員 佐藤　こうじ	期間 前期集中			

履修条件
音響部以外の学生を対象とする。

授業の概要
舞台における俳優が知っておくとよい音響の知識を学ぶ。
音響的なことではなく、俳優視点の授業である。
授業の最後に、実習を行う。

授業の到達目標
音響の仕事、機器の扱いを理解することにより、スタッフの意図を汲み、よりクオリティの高い作品づくりを目指すことができる。
「伝える」ことの難しさを理解することができる。

授業計画
① 搬入、仕込み、サウンドチェックの見学
② ライブハウスPA、舞台音響、ミュージカル音響の違い
③ スピーカーの向きの検証（モニターの必要性）
④ カラオケボックスでキーンとなるのは何故か(ハウリングの検証)
⑤ 有線マイク、ワイヤレスマイク（ハンドマイク、ピンマイク）の取り扱い
⑥ 実際に音を出して音響の仕事を紹介、その効果
⑦ サンプラーの紹介（刀の音、殴る、蹴るなどの音を動きと合わせる音響効果）
⑧ 実習（チームごとにわかれ、テキストを上演する）
⑨ 撤去

授業時間外の学習
実習で使用するプリントを事前配布するので、目を通し理解しておくこと。

教科書・参考書等
プリントを配布する。
筆記用具、舞台で動けるようなシャツ、ズボン着用のこと。
小劇場で作業をするために必要な上履き、運動靴着用のこと。

成績評価
授業への取組み50%、実習への取り組みと態度50%を100点換算して評価する。
S　総合点が90点以上の者
A　総合点が80点以上の者
B　総合点が60点以上の者
C　総合点が50点以上の者
D　総合点が49点以下の者

科目名	対象	単位数	他専攻	キャップ制対象外
舞台音響実習②	演劇専攻１年	1	／	○
担当教員 宮崎　淳子	期間 前期集中			

履修条件
音響部の学生を対象とする。

授業の概要
基本的な音響機材の使用方法、効果を知り、学内イベントや稽古でのセッティング、オペレートに役立てる。

授業の到達目標
- 音響機材の信号の流れを理解し、基本的な結線がスピーディーに行うことができる。
- 簡単なトラブルシューティングができる。

授業計画
①機材の用途、機能を知る。
②ミキサー
③エフェクター
④他、学生から前もって要望があれば応じる。
⑤ケーブルの名称を再確認、統一する。
⑥信号の流れに沿った結線をする。
⑦音が正常に出ない時の原因究明の方法。
⑧仕込図（配線図）を読めるようにする。

授業時間外の学習
適宜指示する。

教科書・参考書等
授業時にプリントを配布。

成績評価
実技試験70%、筆記試験30%で100点に換算。
S　90点以上の者
A　80点以上の者
B　60点以上の者
C　50点以上の者
D　49点以下の者

科目名	対象	単位数	他専攻	キャップ制対象外
舞台監督実習	演劇専攻１年	1	／	○
担当教員 鈴木　健介	期間 前期集中			

履修条件
なし。

授業の概要
演劇を構成する要素を理解する。俳優が集まるだけでは上演にこぎつけるのは難しい。
色々なセクションのスタッフが集まりチームを立ち上げることによって公演の初日を迎えることができ、上演の成果を得ることができる。限られた条件（稽古時間や公演予算、人手不足等）の中で最良の舞台を作るにはその作品に関わる俳優と全スタッフのチームワークが何よりも必要である。
舞台監督はチームワークの要であるので、その仕事の範囲を理解する。また演出の仕事との違いや制作の仕事も理解する。

授業の到達目標
小劇場の舞台を作り、客席を作り、そしてバラス。それを２度繰り返すことでクラス全員のチームワークを体現することができる。

授業計画
1　演劇を構成する要素
2　舞台監督の仕事の範囲（演出家との仕事の違い）
　A.舞台の総括責任者としての仕事
　B.稽古場を作る→進行する
　C.舞台の設営
　D.毎日の上演の安全管理
3　舞台（稽古場）の安全管理
　A.作業中の安全管理
　B.舞台進行上の安全管理
4　簡単な道具制作作業
5　小劇場の舞台の設営、客席を作る
6　小劇場の舞台のバラシ、客席のバラシ

授業時間外の学習
「履修届」を提出した時「プリント」を受け取り、集中講義の履修前に目を通しておく。

教科書・参考書等
必ず作業着を着用し、釘袋その他の作業道具を各自用意し、内履きシューズを使用。

成績評価
集中講義の授業への取組み30%、レポート70%で100点に換算
S　総合点が90点以上の者
A　総合点が80点以上の者
B　総合点が60点以上の者
C　総合点が50点以上の者
D　総合点が49点以下の者

科目名	対象	単位数	他専攻	キャップ制対象外
演出論	演劇専攻１・２年	2	○	○
担当教員 川村 毅	期間 前期集中			

授業の概要

戯曲のリーディングのシミュレーションを行ない、演技と演出の知識と技術の幅を広げる。

授業計画

① 川村毅「戯曲①」リーディングの実践
② フィードバック①
③ 川村毅「戯曲②」リーディングの実践
④ フィードバック②
⑤ まとめ

授業の到達目標

リーディングという表現行為の理解とそれを応用しての将来の展望を獲得できる。
更に、それを通じて演出とはなにかを理解する事ができる。

成績評価

授業態度、課題への取組み、課題の成果を元に総合的に評価する。
S：90点以上
A：80点以上
B：60点以上
C：50点以上
D：50点未満

科目名	対象	単位数	他専攻
コード論Ⅱ	専攻科音楽専攻１年	2	／
担当教員 小林　真人	期間 前期		

履修条件
コード論Ⅰを履修していることが望ましい。

授業の概要
より多くのコードを覚え、ハーモニーについて考え、理解を深めることで、各々が演奏や作編曲をする際のアイデアを増やし、音楽表現を豊かにするための一助にする。

譜面通りに演奏することだけでなく、コードを元にその場に応じて、どのように演奏（作編曲も含め）したらよいか、自分自身で柔軟に創出できるようにする。

コードの説明、実践はピアノを使用して進め、読み方はドイツ音名ではなく英語読みとする。

授業の到達目標
- コードを覚え、その構成音を把握し、自由に転回できる。
- メロディに対してコード付けできる。
- コードの機能と連結を理解して、それを元にコードの発展、応用をできるようにする。
- それらをピアノなどで演奏、表現できる。

授業計画
第1回　ガイダンス
第2回　コード論　基礎編1　コードの仕組み／3和音と4和音
第3回　コード論　基礎編2　ダイアトニックコード/TSDの機能
第4回　コード論　基礎編3　ドミナントモーション/Ⅱm7-V7/SD7
第5回　コード論　基礎編4　同じ機能内の代理/V7とⅡb7
第6回　コード論　基礎編5　代理コードとリハモナイズ
第7回　コードパターンとコード付け1　循環コードと逆循環コード
第8回　コードパターンとコード付け2　ブルース
第9回　コード論　応用編1
第10回　コード論　応用編2
第11回　コード論　応用編3
第12回　コード論　応用編4
第13回　コードパターンとコード付け3
第14回　コードパターンとコード付け4
第15回　まとめ

授業時間外の学習
授業でやった事を復習しておく。
コードに慣れる。

教科書・参考書等
特になし。随時プリントを渡す。

成績評価
(1) 授業態度 (2) 課題発表への取り組む姿勢、レポート等での総合評価
S　総合点90点以上
A　総合点80点以上
B　総合点60点以上
C　総合点50点以上
D　総合点50点未満

科目名	対象	単位数	他専攻
管楽アンサンブル研究A／B	専攻科音楽専攻１・２年	4	／
担当教員 津川　美佐子	期間 通年		

履修条件
管楽器専修（Sx以外）必修。

授業の概要
木管五重奏を中心としたアンサンブルと、管楽アンサンブルを主体にピアノや弦楽器にもお手伝いいただいて色々な編成の合奏を体験していただく。

夏休み中の宿題として木管五重奏編曲を課す（元曲は自由に選ぶこと）。後期最初の授業で発表してもらう。

授業の到達目標
他の楽器の特性を理解する。アンサンブルの基本を身につける。

授業計画
[前期]
第1回　授業内容の説明と曲の選択
第2回～第6回　ハイドン、モーツァルトを中心に演奏実習
第7回～第14回　A.ライヒャ、F.ダンツィを中心に演奏実習
第15回　前期のまとめ演奏と宿題の概要説明
[後期]
第16回～第18回　提出された課題（木管５重奏編曲）の演奏実習と評価
第19回～第29回　フランス、ドイツの近現代木管五重奏曲を中心に演奏実習
第30回　実技試験（コンサート形式で）

授業時間外の学習
授業をスムーズに進行するためにも、自分のパートをしっかり予習して身に付ける様にしてくること。

教科書・参考書等
特になし。

成績評価
授業への取組み、授業中の演奏を重視。

授業・実習への取組みと態度50%、実技試験、課題提出50%で100点に換算

S　総合点が90点以上の者（講義内容を十分に理解し、課題への取り組みが的確かつ秀でた者）。
A　総合点が80点以上の者（講義内容を十分に理解し、課題への取り組みが的確だった者）。
B　総合点が60点以上の者（講義内容の理解、課題への取り組みが良好だった者）。
C　総合点が50点以上の者（講義内容の理解、課題への取り組みが不十分だった者）。
D　総合点が49点以下の者（講義内容を理解しなかった者、学期末試験未提出者、授業への取り組み、受講態度などに問題がある者）。

科目名	対象	単位数	他専攻
室内楽研究A／Cb	専攻科音楽専攻1・2年	2	／
担当教員 北本　秀樹	期間 前期		

履修条件
弦楽器専修を中心とするが他の専修の履修も可。
室内楽に興味と意欲のある学生。

授業の概要
あなた達が今演奏してみたい室内楽。
将来演奏してみたい室内楽を授業で行っていきます。

授業の到達目標
- 作曲家の意図を読み取ること、それを演奏能力の向上につなげる。
- アンサンブル能力の向上。

授業計画
第1回　ガイダンス及び曲目の検討。
第2回　曲目とメンバーを決定。
第3回　パート練習。（レッスン）
第4～7回　アンサンブル実習。
第8回　楽曲のまとめ。発表演奏の曲を決定。
第9回　パート練習。（レッスン）
第10～14回　アンサンブル実習。
第15回　発表演奏。

授業時間外の学習
スコアリーディング、パート練習をしっかり練習しておくこと。

教科書・参考書等
なし。

成績評価
成績評価については、授業への取り組み・学期末課題の結果を総合的に判断して行う。
S　総合点が90点以上の者（授業内容を十分に理解し、演奏能力、課題への取り組みが的確かつ秀でた者）。
A　総合点が80点以上の者（授業内容を十分に理解し、演奏能力、課題への取り組みが的確だった者）。
B　総合点が60点以上の者（授業内容の理解、演奏能力、課題への取り組みが良好だった者）。
C　総合点が50点以上の者（授業内容の理解、演奏能力、課題への取り組みが不十分だった者）。
D　総合点が49点以下の者（授業内容を理解しなかった者、演奏能力、学期末課題未提出者、授業への取り組み、受講態度などに問題がある者）。

科目名	対象	単位数	他専攻
室内楽研究B／Da	専攻科音楽専攻1・2年	2	／
担当教員 阪本　奈津子	期間 後期		

履修条件
特になし。

授業の概要
学生と室内楽要員によるアンサンブルを通して、基本的な合奏能力の向上、各作曲家のスタイルの理解を深める。

授業の到達目標
互いに尊重し、楽しみながら音楽作りをしていく中でアンサンブルの基本を習得する。

授業計画
第1回　ガイダンス及び曲目の検討
第2～5回　古典派の室内楽作品
第6～9回　ロマン派の室内楽作品
第10～13回　近.現代作品
第14～15回　発表演奏

授業時間外の学習
課題になった作品を、各自、各グループで事前に練習を行うこと。

教科書・参考書等
特になし。

成績評価
成績評価については、授業への取り組み・学期末課題の結果を総合的に判断して行う。
S　総合点が90点以上の者（授業内容を十分に理解し、演奏能力、課題への取り組みが的確かつ秀でた者）。
A　総合点が80点以上の者（授業内容を十分に理解し、演奏能力、課題への取り組みが的確だった者）。
B　総合点が60点以上の者（授業内容の理解、演奏能力、課題への取り組みが良好だった者）。
C　総合点が50点以上の者（授業内容の理解、演奏能力、課題への取り組みが不十分だった者）。
D　総合点が49点以下の者（授業内容を理解しなかった者、演奏能力、学期末課題未提出者、授業への取り組み、受講態度などに問題がある者）。

科目名	対象	単位数	他専攻
室内楽研究B／Db	専攻科音楽専攻１年	2	／
担当教員 藤沼　恵美子	期間 後期		

履修条件

ピアノ専修の学生を対象とするが、ピアノを含む室内楽曲を体得したい他の器楽専修の履修も可。

授業の概要

ピアノを含む室内楽作品を取り上げ、アンサンブルにおける奏法や音楽作りを学んでいく。

アンサンブルにおいては、ソロ以上に音に対する意識や柔軟性が求められる場合がある。共演する楽器の特性をふまえた上での音色作りや響きのバランス、呼吸感等、ピアノパートの役割を果たすために必要な具体的な奏法を実践で学ぶ。

異なる楽器の響きの融合を体験したり、楽曲に対するそれぞれの楽器のアプローチの仕方を知ることによって、音楽的視野を広げ、作曲家の意図をふまえた、より幅広い表現を目指していく。

演奏員の協力も得て、マスタークラスの形式で授業を進める。

授業の到達目標

アンサンブルにおける奏法を修得し、相手の音をよく聴きながら、共に音楽をつくり上げる室内楽の楽しさを実感できることを目標に、曲を仕上げる。

授業計画

1　ガイダンス及び曲目の検討。
2　曲目とメンバーを決定。
3　パート練習。（レッスン）
4～7　アンサンブル実習。
8　楽曲のまとめ。発表演奏の曲を決定。
9　パート練習。（レッスン）
10～14　アンサンブル実習。
15　発表演奏。

※授業の進行は履修者の人数によって変更することがある。

授業時間外の学習

自分のパートをよく練習して授業に臨むこと。準備不足では、アンサンブルを楽しむことはできない。

事前にCDを聴いたり、スコアを見るなど、他のパートにも目を向けておくこと。

教科書・参考書等

授業で演奏するグループが、演奏曲の楽譜をその都度配布する。

成績評価

成績評価については、授業への取り組み・学期末課題の結果を総合的に判断して行う。

S　総合点が90点以上の者（授業内容を十分に理解し、演奏能力、課題への取り組みが的確かつ秀でた者）。
A　総合点が80点以上の者（授業内容を十分に理解し、演奏能力、課題への取り組みが的確だった者）。
B　総合点が60点以上の者（授業内容の理解、演奏能力、課題への取り組みが良好だった者）。
C　総合点が50点以上の者（授業内容の理解、演奏能力、課題への取り組みが不十分だった者）。
D　総合点が49点以下の者（授業内容を理解しなかった者、演奏能力、学期末試験未提出者、授業への取り組み、受講態度などに問題がある者）。

科目名	対象	単位数	他専攻
室内楽研究B／Dc	専攻科音楽専攻１・２年	2	
担当教員 白尾　隆	期間 後期		

履修条件

フルート専修の学生を対象とする。

授業の概要

フルートによる二重奏～五重奏（他の楽器を含まない）の重要なレパートリーの習得。

授業の到達目標

- 仲間と協調しながら自己をよく主張し音楽を表現するという、アンサンブル力の基本的な強化を目指す。

授業計画

課題曲の編成により、数グループに分け、状況を見ながら、期間内に、できるだけ多くのレパートリーを勉強する。

クーラウ、クンマー等の古典から、ロレンツォ、デュボワ、ボザ等の近代作品を習得する。

1　ガイダンス及び曲目の検討。
2　曲目とメンバーを決定。
3　パート練習。（レッスン）
4～7　アンサンブル実習。
8　楽曲のまとめ。発表演奏の曲を決定。
9　パート練習。（レッスン）
10～14　アンサンブル実習。
15　発表演奏。

授業時間外の学習

個人レッスン同様、可能な限り仲間と練習し、授業までによく準備し、また復習すること。

教科書・参考書等

楽譜をその都度貸し出すので、各自コピーすること。

成績評価

成績評価については、授業への取り組み・学期末演奏発表の結果を総合的に判断して行う。

S　総合点が90点以上の者（授業内容を十分に理解し、演奏能力、課題への取り組みが的確かつ秀でた者）。
A　総合点が80点以上の者（授業内容を十分に理解し、演奏能力、課題への取り組みが的確だった者）。
B　総合点が60点以上の者（授業内容の理解、演奏能力、課題への取り組みが良好だった者）。
C　総合点が50点以上の者（授業内容の理解、演奏能力、課題への取り組みが不十分だった者）。
D　総合点が49点以下の者（授業内容を理解しなかった者、演奏能力、学期末試験未提出者、授業への取り組み、受講態度などに問題がある者）。

科目名	対象	単位数	他専攻
室内楽研究B／Dd	専攻科音楽専攻1・2年	2	／
担当教員 菊池　かなえ	期間 後期		

履修条件
なし。

授業の概要
本授業では、バロック時代の音楽を題材とし、ひとつの曲を仕上げる時に必要となる要素を明らかにして行く。それぞれの時代の様式感とは何か。バロックの演奏習慣を音楽と結びつけて、音楽学的見知から、また現代の実践の現場から見えて来る様々な方面からのアプローチを知り、実際のアンサンブルを試みる。各回の授業内容は全てリンクしており、履修生の理解度、興味により授業内容の順序を変えて行く可能性あり。各授業の初めに講義をし、後半はアンサンブル実践をして行く。アンサンブルを組み、授業内でのレッスンを重ね、最後に発表を行う。

授業の到達目標
- ひとつの曲を仕上げる時に、どのように演奏するべきか自分で考え、様々な情報の中から選択する能力を身に付ける。

授業計画
1、 バロック時代の音楽について
2、 楽譜について
3、 通奏低音について1
4、 通奏低音について2
5、 アンサンブル組み
6、 フルートの変遷
7、 バロック時代周辺の楽器について
8、 バロック時代周辺の音楽について
9、 舞曲、組曲について
10、演奏習慣について
11、当時の文献を読む
12、音楽修辞学について
13、アンサンブル仕上げ1
14、アンサンブル仕上げ2
15、発表

授業時間外の学習
アンサンブル曲の情報収集を自分なりにやってくる事。また、個人練習、グループでの練習を充分にし、自分の参加していないアンサンブルに関しても興味を持って聴くこと。

教科書・参考書等
プリントを配布。

成績評価
成績評価については、授業への取り組み・学期末演奏発表の結果を総合的に判断して行う。
S　総合点が90点以上の者（授業内容を十分に理解し、演奏能力、課題への取り組みが的確かつ秀でた者）。
A　総合点が80点以上の者（授業内容を十分に理解し、演奏能力、課題への取り組みが的確だった者）。
B　総合点が60点以上の者（授業内容の理解、演奏能力、課題への取り組みが良好だった者）。
C　総合点が50点以上の者（授業内容の理解、演奏能力、課題への取り組みが不十分だった者）。
D　総合点が49点以下の者（授業内容を理解しなかった者、演奏能力、学期末試験未提出者、授業への取り組み、受講態度などに問題がある者）。

科目名	対象	単位数	他専攻
ギター・アンサンブルC／D	専攻科音楽専攻1・2年	2	／
担当教員 佐藤　紀雄	期間 通年		

履修条件
ギター専修者必修。

授業の概要
古典から現代までのギターアンサンブル作品をオリジナル曲、編曲作品に加え学生自身の作品、学生自身による編曲作品等を取り上げる。独奏楽器であるギターの習得過程でアンサンブルの経験や技術を磨く機会得ることは特に重要であり、将来、様々な楽器とのアンサンブルや、新しい作品の演奏の際に何れの楽器とも同等に演奏に加わり高いアンサンブルを一緒に楽しみながら達成できるための準備として欠かせない経験である。
その経験のなかで、ギターと言う楽器がもつ独自の特性や個性を再認識するば場ともなるに違いない。
さらには、将来、様々な楽器とのコラボレーションなど多様な場に合わせた自在な編曲を自信で行えるようアレンジを試す貴重な場にしてもらいたい。

授業の到達目標
年二回の発表会に向けて、アンサンブルの課題曲の演奏を完成させる。

授業計画
1～5回　カルメン組曲
6～10回　ロッシーニ『泥棒かささぎ』序曲
11～15回　バントゥークイッカン
16～20回　ヴィヴァルディー四季より『春』
21～25回　ラヴェル『ラ・ヴァルス』
25～30回　レオ・ブローウェル『雨のあるキューバの風景』

授業時間外の学習
授業で学ぶ作品のスコアをよく読んで、他のパートと自分の受け持つパートとの関係をよく頭に入れておく。作品の背景や、作曲家についての知識を得ておく。

教科書・参考書等
開講時に楽譜を配布。
音楽史、楽典書、関係のある書物を紹介。

成績評価
成績評価については、授業への取り組み・学期末課題の結果を総合的に判断して行う。
S　総合点が90点以上の者（授業内容を十分に理解し、演奏能力、課題への取り組みが的確かつ秀でた者）。
A　総合点が80点以上の者（授業内容を十分に理解し、演奏能力、課題への取り組みが的確だった者）。
B　総合点が60点以上の者（授業内容の理解、演奏能力、課題への取り組みが良好だった者）。
C　総合点が50点以上の者（授業内容の理解、演奏能力、課題への取り組みが不十分だった者）。
D　総合点が49点以下の者（授業内容を理解しなかった者、演奏能力、学期末課題未提出者、授業への取り組み、受講態度などに問題がある者）。

科目名	対象	単位数	他専攻
演劇特別研究①②	専攻科演劇専攻１・２年	2	／
担当教員 田中　壮太郎	期間 通年		

履修条件

プロの俳優と同様のモチベーションを持って取り組む事。

授業の概要

多くの演技論の土台となっているスタニスラフスキー・システムをベースに演技を習得してゆく。演技とは行動行為であり、感情、状態、雰囲気を表現する事とは異なる。

授業では演技を行動と捉え、登場人物の基本行動を洗い出しそれを更に小さな行動へと分解してゆく。その行動の一つ一つが順繰りに小さな「適応」を生み出す。適応というのは相手とのコミュニケーションであり、毎日、新しく生まれてくるものだから決めることはできない。そして行動や適応は役というより「自分」が行動する事でしか達成できない。これらの事を踏まえ、シーンワークを通してドラマを動かす演技を習得してゆく。

授業の到達目標

シーンワークを通して、実際の舞台や映像で共通して求められる演技力の獲得、またはそれらと自分の演技を距離の自覚することができる。

授業計画

第1回　授業ガイダンス
第2回　前期シーンワークの作品発表　ウォーミングアップ
第3～4回　読み　作品についての話し合い
第5回　配役発表　読み合わせ
第6～7回　読み合わせ
第8回　立ち稽古1-1
第9回　立ち稽古1-2
第10回　立ち稽古1-3
第11回　立ち稽古1-4
第12回　立ち稽古1-5
第13回　立ち稽古1-6
第14回　立ち稽古1-7
第15回　前半発表
第16回　後期シーンワークの作品発表　配役発表　読み合わせ
第17～20回　読み合わせ
第21回　立ち稽古2-1
第22回　立ち稽古2-2
第23回　立ち稽古2-3
第24回　立ち稽古2-4
第25回　立ち稽古2-5
第26回　立ち稽古2-6
第27回　立ち稽古2-7
第28回　立ち稽古2-8
第29回　立ち稽古2-9
第30回　後期発表
※授業内容に関しては、その進行具合によって多少の前後がある事を承知しておくこと。

授業時間外の学習

- 作品に対するあらゆる方面からの理解のためのリサーチ。
- 「台詞を自分に落とす」という段階までの台詞の記憶。

教科書・参考書等

教科書・教材は授業時に発表。
参考書・必要に応じて随時指定。

成績評価

①授業への取り組み　②課題の成果　③各々の障壁や課題に対する姿勢　④授業期間中の成長、変化　⑤センス

S　①～⑤が全て高いレベルで評価できる者（元々演技力が高い場合は④は考慮に入れない）。
A　①～⑤のうち３つが高く評価できる者、もしくは総合的に見てやや高く評価できる者。
B　①～⑤のうち２つが高く評価できる者、もしくは総合的に見て標準以上だと評価できる者。
C　①～⑤のうち１つが高く評価できる者、もしくは総合的に見て標準よりやや劣ると評価できる者。
D　総合的に見てあまり評価できなかった者。

科目名	対象	単位数	他専攻
劇上演実習Ｃ(専１最終公演)	専攻科演劇専攻１年	4	／
担当教員 シライ　ケイタ	期間 後期集中		

履修条件

40日間にわたる稽古･本番の全日程に参加すること。欠席･遅刻･早退は一切認めない。スタッフワークを含め、集団のチームワークを重んじること。

授業の概要

プロの演出家の指導の下、一本の作品を完全上演し、演技者としての能力を向上させていく。

授業計画の準備上、履修登録の時期以前に出演するかどうか、学生の意思を確認することがある。その意思が確認されたあとで出演を取り下げることは学生、スタッフ、演出家を含む座組み全体に重大な迷惑をかけることになるので、できない。さらに、履修登録後の登録や取り消しは認められないので注意すること。

なおこの公演は、調布市せんがわ劇場において調布市の指定事業として行われるものである。そのことを充分に理解し、さまざまな事情にも十分配慮した進行に貢献することが求められる。学内での劇上演よりも尚一層の努力と意識の向上を目指す。

この実習では、チケット販売等を通じて、観客を集めることの大切さも学んでいく。

スタッフのみの参加でも例外的に単位を認定することがあるので、事前に専攻主任に確認すること。スタッフとして単位認定するにふさわしい時間と質を負担し、パフォーマンスの完成度をあげることに貢献した場合のみ、単位が認められる。

授業の到達目標

公開にふさわしい完成度の高い上演作品を上演することができる。

授業計画

実習のプロセスは作品および演出家の方針によるが、おおむね以下の流れに沿って進行する。

1　本読み①
2　本読み②
3　本読み③
4　上演のために必要なスタッフワークの役割分担、芸術的方針の共有①
5　上演のために必要なスタッフワークの役割分担、芸術的方針の共有②
6　たち稽古①
7　たち稽古②
8　たち稽古③
9　たち稽古④
10　舞台の仮組み
11　舞台稽古①
12　舞台稽古②
13　舞台稽古③
14　本番
15　創作プロセスを振り返って、次の目標を獲得する

作品の理解、演出意図の把握に努め、主体的な姿勢で稽古に臨むことが求められる。

授業時間外の学習

様々なミーティングを行うたびに、次の準備の動きを指示し、あるいは話し合うので、毎回、ミーティングでなにが合意されたか、記録を書き、内容を復習すること。また、ミーティングでは合意に達せず話し合いが継続される項目もあるので、その内容について自ら案を次回のミーティングで発表できるように事前準備をすること。毎回指示された内容について稽古や作業を行い、指導者にその成果を提示すること。実習中に出された批評、指導された具体的なだめだしを毎回、事後に検討し、意味を理解し、改善すること。稽古や準備の段階が進むにつれ着実に完成度を高めるように自覚的に臨むこと。

教科書・参考書等

稽古開始までに台本配布。必要に応じて指示する。

成績評価

①授業態度　②課題の成果　③表現者としての真摯な姿勢　④自らを研鑽する意欲　⑤俳優としての体調管理

S：90点以上、①～⑤のうち全てを獲得した者
A：80点以上、①～⑤のうち４つを獲得した者
B：60点以上、①～⑤のうち３つを獲得した者
C：50点以上、①～⑤のうち２つを獲得した者
D：49点以下、①～⑤のうち１つしか獲得できなかった者

科目名	対象	単位数	他専攻
ワークショップA／B	専攻科演劇専攻1・2年	1	／
担当教員 鵜山　仁	期間 前期集中		

履修条件

ワークショップ全日程に参加すること。欠席、遅刻、早退は一切認めない。

授業の概要

各ジャンルの第一線で活躍されている演劇人・アーティストにご指導いただき、前期・後期に各一回ずつワークショップを行う。

授業計画の準備、履修登録後の登録・取消は一切認めないので注意すること。また事前に課題が提示されることもあるので、その場合は十分に準備してワークショップに挑むこと。

授業の到達目標

- 演技・表現のメソッドを集中的に訓練し、演劇・舞台表現に関する理解を体験的に深めることができる。
- 修了年次であることを意識し、今後の演劇活動における社会貢献に直結する技術や思考を獲得することができる。（専攻科2年）

授業計画・授業時間外の学習

ワークショップ担当者は各学期の開講時に、授業計画を発表するが、おおむね以下の流れに沿って進行するであろう。

第1～3回　本読み
第4回　キャスト発表
第5～13回　たち稽古
第14回　課題発表
第15回　創作プロセスを振り返って、次の目標を獲得する

教科書・参考書等

稽古開始までに台本配布。必要に応じて指示する。

成績評価

①授業態度　②課題への取り組み　③表現者としての真摯な姿勢　④自らを研鑽する意欲　⑤課題の成果

S　①～⑤のうち全てを獲得した者
A　①～⑤のうち4つを獲得した者
B　①～⑤のうち3つを獲得した者
C　①～⑤のうち2つを獲得した者
D　①～⑤のうち1つしか獲得できなかった者

科目名	対象	単位数	他専攻
ワークショップC／D	専攻科演劇専攻1・2年	1	／
担当教員 和田　喜夫	期間 後期集中		

履修条件

ワークショップ全日程に参加すること。欠席、遅刻、早退は一切認めない。

授業の概要

各ジャンルの第一線で活躍されている演劇人・アーティストにご指導いただき、前期・後期に各一回ずつワークショップを行う。

授業計画の準備、履修登録後の登録・取消は一切認めないので注意すること。また事前に課題が提示されることもあるので、その場合は十分に準備してワークショップに挑むこと。

授業の到達目標

- 演技・表現のメソッドを集中的に訓練し、演劇・舞台表現に関する理解を体験的に深めることができる。
- 修了年次であることを意識し、今後の演劇活動における社会貢献に直結する技術や思考を獲得することができる。（専攻科2年）

授業計画・授業時間外の学習

ワークショップ担当者は各学期の開講時に、授業計画を発表するが、おおむね以下の流れに沿って進行するであろう。

第1～3回　本読み
第4回　キャスト発表
第5～13回　たち稽古
第14回　課題発表
第15回　創作プロセスを振り返って、次の目標を獲得する

教科書・参考書等

稽古開始までに台本配布。必要に応じて指示する。

成績評価

①授業態度　②課題への取り組み　③表現者としての真摯な姿勢　④自らを研鑽する意欲　⑤課題の成果

S　①～⑤のうち全てを獲得した者
A　①～⑤のうち4つを獲得した者
B　①～⑤のうち3つを獲得した者
C　①～⑤のうち2つを獲得した者
D　①～⑤のうち1つしか獲得できなかった者